

心にのこるエピソード

「あなた、眉間のしわ」

当時、係長であった私は、責任の重さに緊張しながら毎日を過ごしていました。

Aさんは、子宮頸がんで腹膜播種や脳転移もある厳しい状態の中でも、顔を合わせるたびに看護について教えてくださる、看護師として私がお世話になった大先輩でした。

ある夜勤の日。その頃のAさんは、話の辻褄が合わないことがありました。ナースコールが続く中、私がベッドサイドへ向うと弱々しい声で「そばにいてちょうだい」とおっしゃいました。私はその夜、他の看護師の協力を得ながら、Aさんのそばで過ごしました。安心したように眠るAさんの姿をみて、私自身も胸が温かくなったことを覚えています。

その想いは看護師長となった今も生きています。セル看護提供方式®へ看護体制を変え、「ナースの居場所は患者のそば」を合い言葉に、眉間のしわに気を付けながら、患者に寄り添う看護を大切にしています。

那須赤十字病院 益子 みどり

起き上がりこぼし（勇気がでた出来事）

起き上がり小法師（おきあがりこぼし）は会津を代表する縁起物で、転んでもすぐに立ち上がるところから、粘り強さと健康のシンボルとして縁起がいいとされています。毎年初市で家族の人数より1個多く買う習わしがあり、会津の家庭には欠かせない縁起物になっています。

小学校の裏庭に、一匹の白い雑種犬が現れるようになった。その犬は、きまって門の横に座っていた。小学生だった私は、そのころ祖父を亡くし、友達とおしゃべりするのも避けていた。けれど、その犬の隣にいと、不思議と気持ちが安らいだ。その白い犬は、話しかけても少ししっぽを振るだけ。

ある日、母にその話をすると、「その犬は、寂しい人の隣にいるのが得意なんだね」と笑った。

いま、患者さんと向き合う中で、ふとあの白い犬を思い出す。人は励まされるよりも、ただ静かに隣にいてくれる誰かに救われることがあるのだと。

あの時の白い犬のように、誰かの心に寄り添える存在でありたいと思いながら今日も患者にそっと向き合っている。

自治医科大学附属病院 田邊 由美子